

日蘭水環境市民交流事業について

日蘭水環境市民交流会実行委員会 事務局長 山道 省三

日蘭水環境市民交流事業を始めることになったのは、ふとしたきっかけによる。

1998年から建設省が定めた「川の日」(毎年7月7日)の事業として、市民と行政が共同して行なう「川の日」ワークショップが行なわれてきた。このワークショップは、私達にとってどんな川が「いい川」なのか、市民と行政(河川管理者)の双方からこれぞと思う川をパネルで持ち寄り、公開審査をして、確かに「いい川」「いい川づくり」と思われるものを皆で称えよう、そしてそのイメージを川の守り手(市民)と川の造り手(河川管理者)双方が共有していこうとする目的で始まったものである。

第1回から100件近くの応募があり、400名近くの人たちによる熱気にあふれた審査が行なわれ、ワークショップの最後に「いい川」と「いい川づくり」の各部門でグランプリが選ばれ、手作りの表彰状を渡して大会は終了する。

昨年の第2回目のワークショップ開催時に、こうした交流が海外ともできるのではという話になり、折から2000年が日蘭交流400周年でもあり、川や水の分野の交流をしようということになった。

オランダと日本の最初の接点は、1600年オランダの貿易船団の一部が、航海途中暴風雨に遭い、九州大分の臼杵に漂着したことから始まる。以来、長崎出島を拠点として交易、江戸参府等による情報、文化の交流、明治政府によるオランダ人技術者の招聘等、両国には極めて深い関係が築かれてきた。とりわけ、明治政府による近代国家形成期における河川、港湾の整備には、オランダの干拓、河川改修、築堤など治水・利水技術が多大な貢献をしたとされる。そうした背景が、「川の日」ワークショップのグランプリ受賞者を派遣することや、世界水フォーラム(2000年3月)への子どもたちの派遣、そしてこの日蘭水環境交流会による交流事業へと広がっていったと考える。

日蘭水環境市民交流事業

2000年3月にオランダのハーグ市で開催された第2回世界水フォーラムの企画イベントとして、スウェーデンに本拠地をおくNGO団体のグローバルフリーにより世界30ヶ国から4～5名の子ども達を集めてのフュ

ーチャーベッセル(未来の船建造)が行なわれた。このイベントは、東北、北上川沿いにある岩手県川崎村の子ども達が参加し、交流を行なってきた。このイベントで知り合ったハーグ市の子ども達を窓口として、日蘭水環境市民交流事業(以下、交流事業)の企画が生み出された。

交流事業は、大人と子ども交流の2つの部門に分け、2000年のうちに次に示す4つの事業が行なわれることになり、実施された。

1. 日蘭水環境子ども交流会・日本の子どもたちをオランダに派遣
2. 日蘭水環境子ども交流会・オランダの子どもたちの日本訪問
3. オランダ国フローニンゲン州における「Water over Wolfsbarge」Projectオープニングシンポジウムへの参加
4. 日本での日蘭水環境シンポジウムの開催

この事業の運営に当たっては、全国の川や水に関わる活動をしているNPO団体、オランダ大使館、文部省、建設省から実行委員会を構成し、推進体制を作った。

委員会のメンバーを紹介すると次のとおりである。

- ・実行委員長 横山 十四男
(全国水環境交流会)
- ・実行委員 草野 重芳
(鶴見川を楽しくする会)
- 三井 元子
(足立環境ネットちえのわ)
- 岡 裕二
(九州水環境ネットワーク)
- エリック・H・ヴァン・コーイ
(オランダ大使館)
- 山道 省三
(NPO法人多摩川センター)
- 足立 敏之
(建設省河川局)
- 工藤 啓
(建設省荒川下流工事事務所)
- 下村 善量
(文部省青少年教育課)
- 森川 一郎
(財)リバーフロント整備センター)

事業の概要

1. 日蘭水環境子ども交流会

～日本の子どもたちをオランダに派遣～

この事業は、2000年8月24日～31日の8日間、日本の子ども達20人と大人のサポーター8名がオランダの水環境を視察する事、現地の子供達との交流を目的に行なわれた。

日本からの派遣隊である子ども20名の選抜は、5月20日から6月20日までの期間で「オランダへ！子ども派遣隊募集」としたチラシやインターネット等を通し、全国の小・中学校、教育委員会、NPO団体に呼びかけ、9歳～17歳の子供達に作文による募集を行った。テーマは、

- ・日本の川や水がどうあったらいいかについてのあなたの提案、あなたが望むこと
- ・日本とオランダで水や川についてどのような交流をしたいか
- ・世界の中で、大切な水をどう守るか

として、400字詰原稿用紙10枚以内、絵、イラスト、図表自由という条件とした。その結果、短い募集期間にもかかわらず全国から1,102件の応募があった。

ともあれ、この1,000件を超す応募には事務局も驚くとともに、どう審査をするか戸惑うばかりであった。取りあえず、応募の課題を満たしているか、子ども達の熱い思い、ユニークな視点を考慮しつつ、1次、2次の2回に分け審査することになった。

1次審査は、14名の都内のPTA役員、NPO、建設省関係機関、実行委員等により次の様な手順で行なった。

応募作品の年齢別分類（小学生、中学生、高校生）分類された年齢別総数に応じ、付託数約40編を目処に比例配分（小学生20編、中学生16編、高校生4編を選出目安とした）

各年齢別の作文地域ごとの応募数に応じて選出作品数を地域ごとに比例配分

地域ごとに担当を決め、審査

候補作文を選出（文章の稚拙さよりも、自分の意見がのべられているか？熱意を感じるか？を重視）候補作文を更に数名で審査し、選出目安に近くなるよう絞り込み

その結果、小学生部門23件、中学生部門20件、高校生部門4件が1次審査を通過し、後日、実行委員を主体とした2次審査に付託された。

2次審査は、全国の地域配分、男女配分、年齢配分を考慮し、各委員に事前に精読してもらい、3段階評価で最終20名の派遣者が決まった。

この事業に本稿の多くをさいたのは、応募された作文のほとんど全てに子ども達の思いが凝縮されていると強く感じたからである。中には担任の先生から「山奥の分校の生徒を未だ見ぬ外国へぜひ！」との添状もあったりして、審査員はその選考に苦慮したからである。そして、応募してくださった多くの子ども達にこの機会にお礼を申し述べたかったからでもある。

という訳で、とうていその作文を捨てるに憚りがたく、事務局にまだ保管している。そして、晴れて選抜された20件の作文は製本し、関係者に配布すると共にオランダ語に翻訳し、訪蘭時にオランダの子ども達にプレゼントした。

さて、オランダ訪問は、大堤防や運河、自然保護地区、農村への訪問、風車保存地区、船舶博物館見学をはじめ、現地の子供達の全行程案内という協力を得て、無事帰国した。

そして、その旅行記が全員から事務局に送られてきている。いずれかの機会に発表できればと考えている。



写真 - 1 日蘭水環境子ども交流会
日本の子ども達がオランダへ
風車小屋（キンダーダイク）の前で（8月）

2. オランダの子ども達の日本訪問

この事業は10月21日～27日の間に行なわれた。オラ

ンダの子ども達の派遣選抜は、3月に世界水フォーラムで交流し、また、日本からの訪蘭にあたって同行してくれたハーグ市の子ども達を中心に編成された。13名の子ども達とその先生、親、ボランティアの7名である。

当初は、日本の夏休み期間を考えていたのだが、オランダ国内の事情で秋の休日を利用して来日した。プログラム、メニューの目的は、

オランダでは珍しい透明な水の流れる川体験

日本の川の文化との触れ合い

火山と急流河川の見学

日本の子ども達との交流

を主とした。

東京では多摩川、隅田川、荒川、そして九州に移動し、長崎の出島、原爆資料館、島原の雲仙普賢岳と水無川の改修、熊本での河川プールでの水遊び、そして阿蘇山と湧水体験ということで、忙しいスケジュールにもかかわらず、元気に帰国した。この間、建設大臣、オランダ大使、長崎県副知事訪問と、日蘭の親善大使の役割を果たしてもくれた。また、先に訪蘭した日本の子ども達も行く先々で迎えてくれたし、熊本では学校を挙げて歓迎していただいた。すでにインターネットで子ども同士の交流が始まっているとも聞く。



写真 - 1 オランダの子ども達が日本へ建設省にて副建設大臣を訪問（10月）

3. オランダ国フローニンゲン州における「Water over Wolfsbarge」Projectオープニングシンポジウムへの参加

フローニンゲン州は、オランダの北部にある。この

地で9月18日、現地のNGO主催の自然地、水環境復元プロジェクトを始めるための国際シンポジウムが行なわれる事になり、日本に呼びかけがあった。日本の水環境の保全、改善について紹介をという事であった。その発表は、建設省土木研究所から派遣する事になったが、日本で活動している川や水のNPOもあわせて参加する事になり、九州、近畿、関東の活動団体の中から計8名で9月17日から23日にかけて、オランダでの水環境に関わるその他事業の視察を兼ね訪蘭した。

ウォルフスバーク（地域名）のプロジェクトは、この地域にあるサウトラーデル湖とそこに流入するフンゼ川の水質改善及び自然地回復を目的に、次に示すような調査、実験を行なうことになった。

- ・湿地回復のための実験（対象地において、動植物の生育・生息状況をモニタリング）
- ・湿地回復にとまなう、隣接する湖への水の流入速度の変化（緩和）
- ・湿地による水質の変化（浄化機能）
- ・魚の移動状況
- ・動植物の繁殖、採餌場所等の創出
- ・多くの人を訪れる魅力的な自然景観の創出

である。

このプロジェクトは、1998年よりフローニンゲン景観保護財団が自然回復のための整備を進めているところである。本事業は、キックマン・フーズ・ヨーロッパからの資金提供によって前進した。これまでに、本プロジェクトに要した費用は、400万ギルダ（約2億円）。このうち、100万ギルダの資金提供がキックマンより提供された（残りの300万ギルダは国・地方自治体、民間企業など）ものである。今回のプロジェクトに関わる土地買収対象となったエリアは約45haである。

フローニンゲン景観保護財団は、NGOとはいうものの、日本での解釈とはやや異なる。その活動のうち、政府や自治体の出資により土地の買収を進めていて、財団所有地はこの湖周辺でも今後1,800haの買収を予定している。

私達のこのプロジェクト見学の目的は、事業推進にあたってNGO、企業、行政の役割分担を知ると共に、とくに企業との関係を知る事であった。

現在、日本の国内においても川や水辺の環境保全、

回復の事業を官・民・企のパートナーシップで始めようとする動きがあり、中でも企業の参画を促進したいという思いが全国のNPOの中にあったからである。

そして、こうした事例を日本に紹介してもらおうと、12月3日、東京で日蘭水環境シンポジウムを企画している事もあって、関係者に対し情報収集を行なった。

今回の訪蘭はシンポジウムへの参加の他、干拓地での自然復元事業の視察、水供給施設訪問、フローニンゲン州庁舎及び水利管理局、農業経済協会でのヒアリングを行なってきた。そして、東京でのシンポジウムへ参加して下さる方々を紹介して欲しいと依頼し、帰国した。

4. 日蘭水環境シンポジウム

このシンポジウムには、12月3日午後から墨田区のすみだりバーサイドホールで3名のオランダからの招聘者と日本の行政、NPO、企業関係者3名をパネラーに行なった。テーマは、「水環境の保全、改善のためのパートナーシップ～NGO、NPOと企業、行政の関係について～」である。オランダから招待したのは、R.G. ヤンセン氏（フローニンゲン地域開発担当行政官、全国水利・治水環境自治体連合会）、J.T.H. コーリンク氏（全国水事業協会（VEWN）、オランダ王立給水事業振興会（KVWN））、G.J. スターケンバーク氏（全国インタープロビシヤル自然環境機関理事長連合会、フローニンゲン景観保護財団理事長）の3名である。3名ともフローニンゲン州を本拠地とする人達であるが、全国機関に参加している事、3. で紹介したプロジェクトの関係者という事で具体的な話が聞けるのではとの期待があった。日本側からは、島谷幸宏氏（建設省土木研究所環境部河川環境研究室室長）、森清和氏（全国水環境交流会代表幹事）、入澤ユカ氏（株式会社INAX）にパネラーで参加してもらい、コーディネーターは新川達郎氏（同志社大学、NPO法人水環境ネット東北代表）をお願いした。

このシンポジウムの目的は、

オランダ及びEUにおける自然環境への保全、回復のための戦略を知る事

オランダにおける同上目的のための行政、企業、市民の関係、制度といった仕組みを知る事

日本の現状の把握と、同上目的のためのパートナーシップ形成の課題、とくに企業参画の方法について議論すること

であった。

シンポジウムには、コンサルタント、日本の川や水のNPO、行政関係者等、130名程度の参加があり、会場からも意見、質問等が出て熱心な議論が行なわれた。

事務局の思いとしては、日本の将来にとってオランダの事例をぜひ参考にしたいと考えていたが、NGOへの行政の支援体制・役割分担、NGO自身の自立のための市民参加の実態やNGOが土地保有まで進めていることなど、重要な知見が得られたと思っている。意外だったのは、オランダ側から、日本のNPOの活動が一市民レベルまで浸透している事に対し、強い興味を示した事であった。こうした状況を考えると、双方にとってもいい議論ができたのではないかと考えている。

シンポジウムに先立ち、オランダからの招聘者を霞ヶ浦や荒川の自然復元、水質改善事業の現場に案内した。国土事情は異なるにせよ、日本での取り組みに対し、大変な興味を持ったようだ。12月5日成田での見送りの際、今後の交流を強く求められた。

今年行なった日蘭水環境市民交流会による4つの事業は、今後の交流の芽をいくつか作ったように思える。とくに子どもの間での異国土、異文化体験は、その感想文の中に多く語られている。

この事業が一過性ものものではなく、次につながるものとして更に交流が促進されれば幸いと考える。

2003年、第3回世界水フォーラムは日本で開催される事が決定している。今年の事業が日本とオランダのみならず、アジアとヨーロッパの交流にまで広がる事ができれば素晴らしいフォーラムになるのではあるまいか。